

オープンサイエンスをデータの側面から考える

榎本 啄杜 (Takuto Enomoto) ・ 甲斐 尚人 (Naoto Kai) ・
長門 裕介 (Yusuke Nagato)

大阪大学 社会技術共創研究センター ・ 大阪大学 D3 センター ・
大阪大学 社会技術共創研究センター

近年、科学のプロセス全体をよりオープンにすることを旨とする「オープンサイエンス」(以下、OS) という運動が注目されている。一口に OS と言ってもその内容は多岐に渡るため、運動全体を表現する「オープン」概念もまた多義的に用いられているが、おおよそアクセスしやすさ、透明性、民主的といったことを指すと考えてよい。一つの見方によれば、OS の推進は世界中のデータへのアクセスを容易にし、新たな知や価値の創出へと繋がるイノベティブなものである。しかし別の見方によれば、研究公正との親和性の高さゆえに研究データ管理の徹底化に繋がり、一部の人にとっては自由な研究をジャマする面倒で厄介なものである。オープン化の過渡期である現在、OS の受け止められ方はアンビバレントと言ってよい。

本ワークショップの目的は、OS を単に推進することではなく、OS が科学に与える多様な影響や課題について一歩立ち止まり、複数の視点からその意義を改めて見直すことにある。そこで本ワークショップでは、OS を構成する要素の中でもとりわけ「データ」の側面に着目する。データは OS の枠組みの中でも重要な要素であり、科学の透明性や再現性に対する影響はもちろん、方法論や科学者コミュニティのあり方にも関わるものである。データの側面から切り込むことは、オープンサイエンスを改めて理解し直す良い出発点となるだろう。

本ワークショップの構成は以下である。まず甲斐は、OS の実務者の観点からの話題提供として、昨今の OS の潮流と、その背景について見通しを与える。そのうえで、OS を実現するための現状最も良い手段と考えられる「研究データ管理 (RDM)」や、データのライフサイクル全体をマネジメントすることの意義を提示する。単純な二者択一では捉えられないものの、差し当たりこれは、OS のうち「守り」の文脈からの話題提供だと言える。一方、続く長門は「攻め」の文脈から話題提供を行う。OS におけるデータの扱いは、科学の方法論や認識論をまたがる仕方で「科学の民主化」へと影響を及ぼす。政治哲学においても重要視されている「民主化」概念が OS によってどのような哲学的含意を持つことになるのかについて、議論が提示される。これらの話題を受け、最後に榎本は、OS の文脈で暫定的に提示されている「(研究) データ」と科学哲学史における伝統的な「データ」に概念的ギャップがあることを指摘する。ここから、OS 時代において有益なデータ概念を改めてデザインし直す可能性が提示される。

改めて、本ワークショップは、OS を単に「社会にとって望ましいもの」として一方的に推進したり、データのオープン化を単なる技術的・運用的課題へと留めることを意図するものではない。これらの議論を通じて、OS が科学に対する哲学的な問いを含むものであることへと目を向け、その価値を改めて吟味する場を提供するものである。